

京都大学	博士（文学）	氏名	黄 一丁
論文題目	『古今集』から『新古今集』の時代における和歌文学と中国文学要素の日本化		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本稿は、六章に分けて、『古今集』から『新古今集』の時代における中国文学要素の日本化という問題を論じるものである。</p> <p>序章では、まず和漢比較文学に関する私見を述べ、従来の和漢比較文学研究を、第一段階の「出典論」、第二段階の「変容論」「機能論」、第三段階の「応用論」という三段階に分けて捉えた。そして、本稿の研究は第二段階と第三段階とに属するものと述べた。更に筆者は、中国文学要素の日本化という概念を提起し、その定義を明らかにした。即ち中国文学要素の日本化とは、日本文学の中に存在する中国文学要素に見られる、日本の言語・自然及び社会の特徴による変化や、日本人の価値観による意識的或いは無意識な改造や、日本特有の文学形式に適應するための変容が発生したプロセスのことである。最後に、中国文学要素の日本化という課題において、『古今集』から『新古今集』までの時代が重要であることを説明した。いわゆる三大歌風のうち、古今調と新古今調は、特に中国文学要素と緊密に関連しつつ成立した。この時代における中国文学要素の日本化を考察することによって、古今調から新古今調への歌風の変遷の実態に関する理解を深めることが出来ると見込まれる。</p> <p>第一章及びその付章では、次章で『千里集』を論じるための準備として、まず未解明であった西本願寺本『赤人集』中の千里歌と『千里集』との関係、及び新出資料である資経本『千里集』ならびに擬定家本『千里集』の本文の価値を論じ、次のような結論を得た。</p> <p>第一に、西本願寺本千里歌は従来知られていた二系統とは異なる第三系統の『千里集』に属し、かつ錯簡を有する伝本である。第三系統は歌順においては流布本系統に近い一方、流布本系統と異本系統とに見られない、より原本に近いと考えられる独自異文を持つ。第二に、金子彦二郎氏によって異本系統の中の最善本とされた桂宮本の本文は、新出資料の資経本及び擬定家本と比べても圧倒的な優位性を有する。最後に、『千里集』の現存する三系統の中でも、桂宮本は句題と和歌双方の本文において優位性を有する一方、流布本系統及び第三系統は歌順において優位性を有すると考えられる。</p> <p>第二章では、中国文学要素の日本化の実例として、『千里集』に見られる中国文学要素の特徴に注目した。『千里集』前半の四季部が白居易による詩想の影響を強く受けていることは先行研究でも指摘されているが、本章では晩秋の雁の歌と初夏の惜春の歌における白詩の影響を中心に論じた。初夏の惜春という詩想は、『千里集』のみ</p>			

ならず、『拾遺集』から『新古今集』にかけての和歌文学に大きな影響を与えている。特に、中国文学に由来する惜春の詩想が「更衣」という日本文学特有の発想と接合し、新しい詠み方を育んだという現象は、典型的な中国文学要素の日本化といえる。

また、『千里集』後半の部立構造は全体的に中国文学の影響を受けており、特に「遊覧」の歌には六朝文学に類似する特徴が顕著に見られる。その影響の大きさは、後世の日本文学に受け継がれていることから察せられる。ただし、『千里集』後半部の構造は、中国文学をそのまま模倣した結果ではなく、漢籍における部立の名称を参照しつつ独自に創案されたものと考えられる。

最後に、『千里集』及び同時代の和歌の特徴から、中国文学要素をストレートに和歌に翻案することは、『古今集』成立の直前の時期における中国文学要素の日本化の一特徴であることを述べた。

第三章では、従来あまり注目されていなかった『陽成院歌合』を取り上げ、そこに見られる中国詩の影響と変容のありさまを述べた上で、そうした変容が中国文学要素の日本化であることを論じた。

本歌合の主題である「惜秋」は、上代より存在する、日本文学に固有の意識とされる。しかし実際のところ『陽成院歌合』の歌には、中国文学、特に唐詩における惜春表現を摂取している表現が多い。

本章第二節では、本歌合における五首の歌に見られる「惜しめども秋は留まらぬ」などの表現が、白居易による惜春詩の表現と関連することを指摘し、この五首の詠者が直接に白居易詩に学んだ可能性、あるいは白居易詩の表現を摂取した惜春の和歌又は惜秋の日本漢詩の影響を受けた可能性を述べた。第三節では、本歌合一六番歌に見られる「はかなくてすぐる秋」という表現が、唐詩における「虚度」又は「空度」の表現に触発された可能性について論じた。第四節では、本歌合における三首の歌に見られる「別るる秋」という表現が、白居易詩に見られる「別春」または「辞春」などの表現を摂取した可能性について考察した。唐詩の世界では秋は物を思わせる季節であり、愛惜される季節とは言い難い。このような惜春詩の表現を惜秋歌に用いる現象も、中国古典文学由来の表現が日本風に変容を遂げた結果と見なすことができる。

本章の考察によって、『陽成院歌合』の和歌には、中国古典文学、特に唐詩の表現に学んだ表現が存在することが分かった。これは従来指摘されていなかった本歌合の特徴であり、そこから本歌合の文学史的意義を再考した。また、『陽成院歌合』の作者達が、唐詩より摂取した惜春表現を、秋の美景を愛惜するという日本人の価値観にあわせて、惜秋という日本文学特有の主題を詠む際に応用したという現象は、『古今集』以降の中国文学要素の日本化の特徴を反映している。この時期には、中国文学要素の変容される度合いが増し、中国文学に存在する主題から日本文学特有の主題へと

取り込まれることも起こるのである。

第四章では、亀を詠む和歌を例として、和歌文学における漢故事の日本化について論じた。『古今集』以降、特に『拾遺集』以降の和歌文学では、それ以前に比べて漢故事の利用が盛んになる。そこでは漢故事という中国文学要素が、徐々に中国文学の本義から離れ、日本人の価値観や風習に合わせて改造されてゆく。このような特徴は、古今調から新古今調へ移りゆく時期の歌風の変化と合致し、時代の傾向を反映していると考えられる。

中国文学に由来する亀の祥瑞思想は、『古今集』以降の和歌では長寿を言祝ぐ歌語に変容する。亀の長寿のイメージはさらに恒久のイメージに変容しつつ、実在の亀から「亀山」という歌枕に繋がってゆく。「亀山」は中国伝来の蓬莱山伝説とも融合し、新たな詠み方が形成される。一方、『法華経』などの仏典にある「盲亀浮木」の比喻が中古の和歌に取り入れられると、仏法を説くための寓言から逢瀬の難しさの象徴へと変容してゆく。

こうした変容は何れも、日本の自然と社会の特徴、又は日本人の価値観に合わせて起こった改造である。従って、亀の歌に取り入れられた漢故事の変容も、『古今集』から『新古今集』の時代における中国文学要素の日本化の例の一つとして捉えることができる。こうした例から、特に『拾遺集』から『新古今集』までの時期に、中国文学要素の日本化が甚だしく進んでいることが分かる。このような傾向は、第二章で初夏の惜春を検討した際に得られた結論とも一致するものである。

第五章では、『新古今集』の直前に成立した『千五百番歌合』における、藤原良経による漢詩判詞という新たな形式を持つ判詞を対象として考察した。中国文学に学んだ漢詩でもって、日本特有の文学形式である和歌の優劣を判じるという営みは、従来の漢詩の機能を日本文学に合わせて一新する試みであり、一種の中国文学要素の日本化と認められる。

『千五百番歌合』夏三において、丹後による「わかるればこれも名残のおしき哉夏のかぎりの日ぐらしの声」という歌に対し、良経は「寒蟬自本秋天物、送夏何因欲惜声」という漢詩判詞をつけている。本章ではまず、「ひぐらし」という歌語の季節感を巡って、良経と丹後との間に相違が生じた理由を解明することを試みた。そのためにまず、詩語「寒蟬」は漢詩では秋のものとして詠まれてきたこと、さらに、先行研究を踏まえつつ、「ひぐらし」は『古今集』から『堀河百首』までの時代において基本的に秋の歌語であり、詩語「寒蟬」の季節感と合致することを検証した。「ひぐらし＝寒蟬」は秋のものであるという良経の判詞は、これらの事実に基づいていることが分かる。続いて丹後歌が「ひぐらし」を夏のものとして詠む背景について考察を行った。『金葉集』以降、俊頼歌の影響もあって、夏末の涼しさを象徴するものとして「ひぐらし」を詠む歌が増え、『新古今集』の直前の時期には、夏における「ひぐら

し」詠の割合が顕著に増加している。『新古今集』夏部における「ひぐらし」は、秋を思わせる歌語の範疇から完全に脱しており、「ひぐらし」は夏末歌で詠まれる方が主流になっていた。このような変容は、「ひぐらし」と、もともと夏の歌語であった「せみ」とが混同されたこととも関係がある。こうした時代の流行に沿って、丹後は「ひぐらし」を夏の歌語と認識し、「夏のかぎりのひぐらしの声」と詠ったのである。

最後に、『新古今集』時代の良経が、「ひぐらし」を詩語の「寒蟬」と同じくもとより秋の歌語だと主張し、自詠においてもそれを実践している理由について考察を行った。夏三の判詞の序文によれば、和漢兼作歌人である良経は、和歌と漢詩とは同じ種類のものと考えている。だからこそ和歌を判じる時にも、詩語の季節を歌語の季節を判断する基準としたのである。良経のこうした意識は、「ひぐらし」「寒蟬」の例以外にも、詩語「雁」と歌語「かり」の例からも窺える。良経が詩と歌とを同類のものと考えていたことは、ただ『千五百番歌合』において漢詩形式の判詞を作成し、漢詩と和歌とを交互に並べる形にしたという形式的な面だけではなく、歌語と詩語との間に季節感の一致を求めるといふ、より本質的な面にもあらわれている。和歌史上においてはじめて「詩歌同類」の思想を明言した良経は、画期的な歌人であった。

『新古今集』の成立する直前の和歌文学に見られる中国文学要素の日本化は、第四章で見たように中国文学要素の内容を改造する一方で、「漢詩判詞」という新たな機能を創出しており、中国文学要素を中国には存在しない分野で利用するところまで進んでいる。これは、『新古今集』時代における中国文学要素の日本化の新たな特徴と認められる。

おわりにでは、序章から第五章までの内容をまとめ、『古今集』から『新古今集』の時代における中国文学要素の日本化について、以下のような結論を述べた。

『古今集』の成立する以前の段階では、まず中国詩を忠実に和歌に翻案し、その中に存在する詩想を素直に受け容れるという特徴がある。『古今集』以降、中国文学要素の日本化がますます活発になり、『陽成院歌合』のように、中国文学に存在しない主題にも中国文学要素が進入する事例がある。その後、『拾遺集』から『新古今集』の時期にかけて、中国文学要素は、日本の社会と自然の特徴、又は日本人の価値観に合わせて歌人によって改造され、甚だしい日本化を遂げた。本稿ではこのように、古今調から新古今調の間における歌風の変遷を、中国文学要素の日本化という視点から捉えることを試みた。

最後に、本稿の社会的意義と和漢比較文学研究者の責務について、筆者の考えるところを述べた。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、平安時代の和歌文学における中国文学の受容について論じるものである。論者自身が序章で述べるように、日本の古典文学の中に中国文学からの影響を探る研究は古くから存在し、漢籍に典拠を求める出典論から、日本的な変容のあり方を解明するものへと深化しつつ、数多くの論考が積み重ねられてきた。本論文もそうした研究史を踏まえつつ、『古今集』から『新古今集』にかけての時期の和歌を対象として和漢比較的考察を試みるものであるが、基本的な文献に本文批判のレベルから再検討を加え、一方では従来ほぼ顧みられることのなかった資料にも光をあてることによって、独自の成果を上げたと評価できる。以下、その成果を章ごとに述べてゆく。

『古今集』に先立つ寛平六年、大江千里は漢詩句を翻案する形で詠んだ和歌を集め、宇多天皇に献上した。この『千里集』は、平安時代の和歌と中国文学との関係を考える上で必須の資料の一つである。本論文は第一章で『千里集』のテキストについて考察し、第二章にて中国文学受容の問題を扱う。

現在『千里集』の伝本は大きく二つの系統に分類され、ほかに西本願寺本『赤人集』にも『千里集』の歌が混入していることが知られている。このうち書写年代という点では『赤人集』混入歌が最も古いが、独立した歌集の形で残っていない上、和歌の配列が混乱しており、扱いに慎重を要するものであった。論者は第一章において、まず『赤人集』混入歌の配列を現存諸本と比較し、その混乱に一定の規則性があることを発見した。そして、綴葉装の写本が錯簡を起こしたものと仮定すればその規則性を説明できるという見通しを立て、錯簡が生じる前の配列を具体的に復元してみせた。自ら復元モデルを試作して複雑な錯簡の過程を検証し、『赤人集』混入歌を『千里集』古写本の一つとして扱ってよいことを証明した力作である。その上で、『赤人集』混入歌の本文が現存二系統より『千里集』原本の本文に近いと判断される例を紹介し、『赤人集』混入歌が実際に『千里集』本文の校訂に役立つことを明らかにしている。近年影印が公刊された擬定家本『千里集』の本文の価値を検討した付章とあわせて、『千里集』研究の基盤を整えるための論考である。

続いて第二章では、『千里集』における中国文学の受容を、特に部立の構成と部立内部の和歌の配列に注目して論じる。『千里集』には、『古今集』では仲秋の景物として扱われている雁の歌を秋部の末尾に配するという特徴がある。また、一般的には春の歌語である鶯の歌を、夏部の冒頭に数首並べている。論者はこうした現象の背景に、中国文学の発想、特に白居易による晩秋の雁を詠む詩や、初夏に鶯でもって春を惜しむ意をあらわす詩からの影響があることを指摘する。『千里集』四季部の構造における白詩の影響は先行研究でも気づかれていたことだが、それがより広範な範囲に及ぶことを明らかにしたもので、『古今集』のような規範が成立する以前、後代の歌集とは異なる独特の部立構成がいかに考案されたかについての示唆に富む論である。

第三章では、延喜十三年九月に行われた『陽成院歌合』を取り上げる。本歌合では「惜秋意」という題で和歌が詠まれているが、その表現に漢詩文の受容が見られるこ

とを論じたものである。たとえば複数の歌人が用いている「惜しめどもとまらぬ秋」という類の表現は、白居易の「春を留むるに住まらず」という詩句、あるいはその白詩の表現を秋に転用した菅原道真の詩句から影響を受けた可能性があるという。また、「はかなくてすぐる秋」という歌句も「虚度」「空度」といった漢語に由来することを、『千里集』の惜春歌における類似の表現を手がかりに検証している。「惜秋」は唐代以前の中国文学には存在しない、日本文学独自の主題とされるが、それを歌に詠む際に漢詩文における「惜春」の表現が応用されたという、興味深い指摘である。このような表現を多用する本歌合がいかなる性質のものなのかは、今後なお追究されるべき課題であるが、従来ほとんど研究対象とされることのなかった本歌合に着目し、その意義を見いだしたことは、本論文の大きな功績といえる。

第四章は、特定の歌集や歌合を扱う他の章とは視点を変え、「亀」を詠む平安時代の和歌を題材に、漢籍・漢訳仏典受容の種々相を描き出したものである。『法華経』に見える盲亀浮木の喩えが恋の歌に利用されるなど、時代が下るにつれて多様な表現が生まれてくるさまが、豊富な実例によって示されている。

最後に第五章では、『新古今集』の前後に時代を移し、藤原良経が絶句の形式で記した『千五百番歌合』の判詞を取り上げる。この「判詩」は形式の珍しさという点では夙に知られていたが、そこで述べられる良経の意見について詳しく分析したものは少ない。論者が注目するのは、「ひぐらし」を夏の歌語として詠む和歌に対して、「ひぐらし」に相当する漢語「寒蟬」が秋の詩語であることを理由に、良経が批判を加えていることである。論者はそこに、詩語と歌語とは同じ季節であるべきだという良経の主張を読み取り、実際に当時の歌壇では「ひぐらし」を夏に詠むことが流行していたにもかかわらず、良経は秋のものとして詠んでいることを、その根拠として提示する。形式のみに注目されがちであった判詞の記述から、和漢兼作の良経なればこそその意識を見抜いた、魅力的な論である。

以上のような価値を持つ本論文であるが、残念ながら、和歌や漢詩の用例を数多く挙げる中に、論拠として必ずしも適切でないものが散見する。それによって論旨が大きく損なわれるわけではないにせよ、用例の正確な解釈に基づいて考証の精度を高めてゆくことが、論者には求められる。また、題目にある「日本化」という概念を、本論中ではかなり幅広い意味合いで用いているが、そうした観点が有効であるかについても吟味が必要と思われ、今後さらに考察を深めてゆくことを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和2年2月17日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。